

教職科目受講者の学力傾向に関する報告

武田 裕紀・渡辺 慧佑

Report on Academic Ability Trends of Students in Teacher Education Courses

Hiroki TAKEDA, Keisuke WATANABE

1. 本報告の内容と目的について

本稿は教職科目である「哲学概論 2A」において、受講生の能力測定のために行った試験の結果報告およびその分析である。試験は 25 行程度の記述であり、問題形式は疑問形の問いに対して肯定・否定いずれかの結論を導くという、フランスのバカロレアを模したものである。したがって、狭い意味での哲学の学力を問うだけではなく、哲学を素材として論述能力を問うものとなっている。

本報告の目的としては、ひとつめに、試験答案を 5 つの項目それぞれ 4 段階のマトリックスに従って評価付けし、本学において教職を目指す学生の強化ポイントを明確にすることである。ふたつめは、ほぼ同一の内容の授業を行った大阪大学外国語学部フランス語専攻「フランス思想講義 b」における同一の試験結果と比較することで、受講生の学力をより広い学力層の中に客観的に位置づけることである。

以上の調査によって、将来教職として教壇に立つことを目指す学生に必要な基礎能力の基準と、その基準に達するよう授業内容を改善していくための方針を提示する。

2. 追手門学院大学「哲学概論 2A」

(1) 「哲学概論 2」の受講生

【試験の受験者の特性】

調査対象人数：28 名

内訳：2 年生 14 名、3 年生 12 名、4 年生 2 名（履修者数：受験者数を確認）

社会学部 20 名、文学部 4 名、地域創造学部 1 名、経済学部 3 名

受講生の平均累積 GPA：2.58（全在学生平均：2.42）

【備考】

①うち 3 名は、授業担当者の他の哲学関連授業を履修しており、有利な状況にあった。

②平均累積 GPA が全学平均よりもやや高く、比較的意欲的な学生が履修している。

(2) 試験の方法と問題

【試験要領】

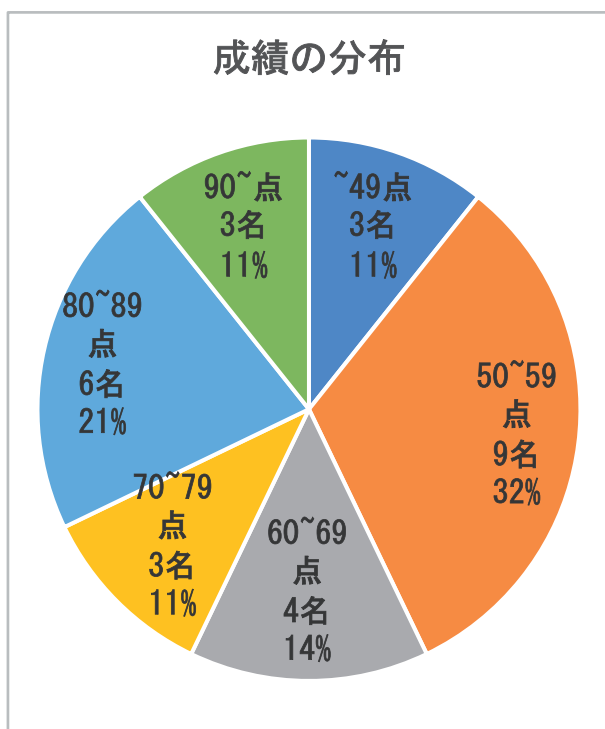
試験時間は 80 分。ノート持ち込み可。通信機器不可。

【問題】

物体と精神の二元論は、われわれが科学的知識を獲得するための哲学的枠組みとして有効か。計 25 行程度で説明せよ。解答用紙が足りない場合は裏面を用いてもよい。答案には、ヒューム（コンディヤック）の感覚一元論も対照として記述してもよい。

(3) 試験の結果

～49	3 名
50～59	9 名
60～69	4 名
70～79	3 名
80～89	6 名
90～	3 名



(4) マトリックスによる能力分析

評価項目	A	B	C	D
論理的一貫性（一貫した主張がある）	9 名 32%	3 名 11%	5 名 18%	11 名 39%
日本語の正確さ	9 名 32%	3 名 11%	12 名 43%	4 名 14%
哲学的概念の正確さ（用語を正確に使える）	1 名 4%	10 名 36%	13 名 46%	4 名 14%
要約力（学習した内容を自分のことばでまとめる）	3 名 11%	8 名 29%	7 名 25%	10 名 36%
論点把握能力（問題文を正確に把握する）	7 名 25%	6 名 21%	7 名 25%	8 名 29%

A：将来の教員としての水準を満たしている。

B：いくつかの修正により、比較的容易に水準に到達できる可能性が高い。

C：現在のところ水準を満たしていないが、方法を掴むことで飛躍的な向上の可能性はある。

D：現在のところ水準を満たしておらず、かつ、答案からその意欲があまり感じられない。

(5) 他科目との相関性

【方法】

第2回試験との総合評価で上位の8名（A群）および下位の6名（C群）の計14名を抽出して累積平均 GPA 順に並べ、2024 年春学期までの平均 GPA と日本語表現の成績との相関性を調べた。

〔学年〕	〔学生所属〕		〔性別〕	群	累積 GPA (2024 春)	日本語表現 評価	日本語表現 素点
3 年	文学部人文学科	1	男性	A	3.78	A	87
3 年	社会学部社会学科	2	男性	A	3.76	A	88
3 年	社会学部社会学科	3	女性	A	3.73	A	81
3 年	文学部人文学科	4	男性	A	3.50	B	71
3 年	社会学部社会学科	5	男性	C	3.44	A	80
2 年	社会学部社会学科	6	男性	A	3.30	A	87
2 年	社会学部社会学科	7	女性	A	3.22	A	85
2 年	社会学部社会学科	8	男性	A	3.21	A	86
2 年	社会学部社会学科	9	男性	C	2.77	B	76
2 年	社会学部社会学科	10	男性	C	2.61	A	80
2 年	社会学部社会学科	11	男性	C	2.52	B	79
2 年	社会学部社会学科	12	男性	A	2.34	A	83
2 年	社会学部社会学科	13	男性	C	2.18	B	73
3 年	社会学部社会学科	14	男性	C	1.40	C	61

グループ	平均/累積 GPA	日本語平均
A	3.36	83.5
C	2.49	74.8
総計	2.98	79.8

【考察】

(1) 本科目上位グループ（A 群）のうち 1 名が、平均 GPA では下位グループに属す。ただし、日本語表現は A 評価であったので、記述能力には適性があるのかもしれない。逆に、本科目下位グループ（C 群）のうち 1 名が、平均 GPA では上位グループに属した。

(2) 全体的な傾向をみるため、ピアソンの積率相関係数（1 に近づくほど相関性が強くなる）を用いて、①哲学概論 2A×日本語表現、②哲学概論 2A×累積 GPA それぞれの相関性を調査した。算出に当たっては、傾向がよりはっきりと表れるよう A・C 群のみを抽出した。結果は、①0.42、②0.56 であった。累積 GPA の方が日本語表現よりも相関性が高い数値が出たが、日本語表現は単独科目であること、1 年生春学期の科目であること、を考慮すれば、本科目と高い相関性があると考えられる。

3. 大阪大学外国語学部フランス語専攻「フランス思想講義 b」

(1) 「フランス思想講義 b」の特性

「フランス思想講義 b」は、大阪大学外国語学部フランス語専攻 3、4 年生対象の科目である。講義科目ではあるが、2 回の講義の後、その内容に該当するテキストを『フランス語で読む哲学 22 選』（朝日出版社、2020）から講読する。本学での「哲学概論 2A」との大きな違いは、フランスの講読に授業時間のおよそ 3 割程度を費やしていることであり、そのため講義はやや早足になっている。

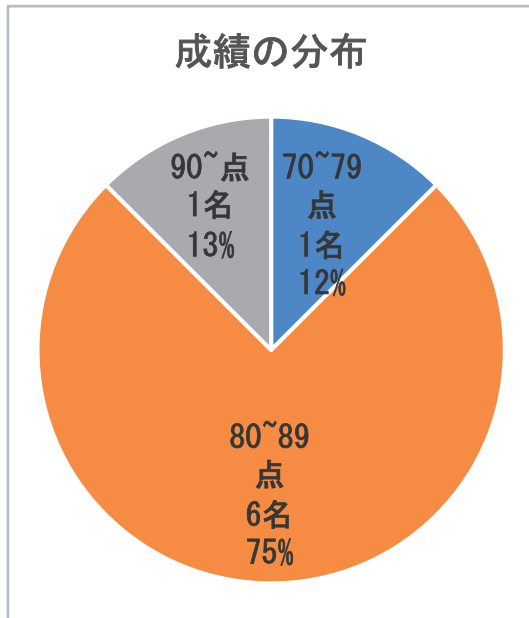
成績評価対象者は 8 名。「フランス思想講義 a」は春学期に別の教員が担当しており、武田は秋学期からの授業となる。教職を目指している学生はいない。

(2) 試験問題

同一の問題である。ただし試験問題は 70 分。事前に、「フランス式の dissertation の様式に沿う必要はない」と注意を促した。

(3) 試験の結果

70～79 1 名
80～89 6 名
90～ 1 名



(4) マトリックスによる能力分析

評価項目	A	B	C	D
論理的一貫性（一貫した主張がある）	3名 38%	4名 50%	1名 13%	0名 0%
日本語の正確さ	6名 75%	2名 25%	0名 0%	0名 0%
哲学的概念の正確さ（用語を正確に使えている）	0名 0%	5名 63%	2名 25%	1名 13%
要約力（学習した内容を自分のことばでまとめる）	2名 25%	4名 50%	2名 25%	0名 0%
論点把握能力（問題文を正確に把握する）	1名 13%	4名 50%	3名 38%	0名 0%

(5) コメント

2024年度の4年生は、1年次がコロナ禍にあたり、語学以外の授業はオンラインが中心であった。そのため成績評価もレポートが多く、対面でこのように長文の答案を仕上げる機会がなかったという。本学でも、コロナ禍以降オンライン授業がL&S科目の半分を占め、さらにこまめな成績評価を求められるようになったため、このように長文の答案を記述させる試験が以前より減少しているのではないだろうか。記述力の涵養は、大学1、2年生に身につけるべきスキルのひとつであり、記述力は在学中の学びや研究の成果を他者に伝えることはもとより、卒業後も生涯に渡って必要とされるスキルであることから、大学1、2年生の間に習熟させておくことが望まれる。

4. 本学の学生との比較考察

(1) 基本的記述能力について

両大学間で、「論理的一貫性」「日本語の正確さ」の差がもっとも顕著であった。B 以上の評価を得ていたのは、大阪大学ではほぼ全員なのに対し、本学では約 4 割である。学年別でみても、2 年生と 3 年生以上に有意な差がなかったので、1、2 年生の間に基本的な記述能力を習得させることが肝要かと思われる。そのためには、各科目でできる限り記述の試験を導入することが望ましい。

(2) 論点構築能力について

(1) に比して、「要約力」「論点把握能力」は、本学の学生が比較的健闘しているように見えるが、個別に見ていくと、1 名の例外を除いて「論理的一貫性」「日本語の正確さ」との相関性が顕著であった。つまり、論点を整理できないことと、論理的な日本語が書けないことの間には、強い相関性があるということである。

生成 AI の進歩に伴って、いわゆる記述を AI に肩代わりさせることが可能になり、また、データを与えられた単純なフォーマットに落とし込むの作業も、AI が得意とするところである。しかし、論点を自分なりに把握し議論の枠組みを構築する能力は、AI が発達しても引き続き求められると考えられ、そうした能力の涵養のために、哲学的なテキストの読解は有効な訓練方法の一つとなろう。

(3) 概念理解について

「哲学的概念の正確さ」は、両大学でもっとも乖離が小さかった項目である。大阪大学の受講生には教職志望者がゼロであることとも関係しているかもしれないが、本学の受講生が、比較的真剣に授業に取り組み、内容を理解しようと努めている証とも考えることができる。「概念理解」という能力は、その他の「情報処理」に関連する能力とは性質が異なるところがあり、いわゆる受験の偏差値では測定しにくいものである。本学に入学した学生が、大学での学びを通してこうした能力を開花させているのは、大変喜ばしいことである。

(4) 本学学生の学力分布について

本学では 28 名中 9 名が 80 点以上であり、この層は大阪大学の受講生に匹敵する成果を挙げている。先のクラス分けで A に分類された学生群がほぼそれに相当し、平均累積 GPA が 3.2 以上になる。特質すべきは、最高点は本学文学部の 3 年生である点である（なお当人は教職志望ではない）。こうしたレベルにあり、また意欲の高い学生が、より高度な内容の授業を履修できるようなプログラムの策定も必要ではないかと思われる。